

平成 30 年 4 月 26 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380188

研究課題名(和文)シベリア抑留帰還者をめぐる米ソ情報戦

研究課題名(英文)War of Information on the Siberian internment returnees between USA and USSR

研究代表者

加藤 哲郎 (KATO, Tetsuro)

早稲田大学・政治経済学術院・その他(招聘研究員)

研究者番号：30115547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、書き下ろし単著『「飽食した悪魔」の戦後—731部隊と二木秀雄「政界ジープ」』(花伝社、2017年)中に発表した。同書第3部「731部隊の復権と二木秀雄の没落」中に第2章「シベリア抑留と米ソ情報戦」を設け、「ドイツ240万人、ハンガリー50万人、日本60万人の強制奴隷労働」「洗脳教育と民主運動」「帰還者米軍尋問—陸軍プロジェクト・スティッチと空軍プロジェクト・リンガー」「陸軍プロジェクト・スティッチで見つかった『ソ連スパイ』352人」「『人間GPS』としての米空軍プロジェクト・リンガー」等について、詳述した(269-284頁)。

研究成果の概要(英文)：The result of this research was published in my book "Postwar history of 'The Devil's Gluttony': Unit 731 and Hideo Futagi's 'Political Jeep'" (Kadensha, 2017). Chapter 2 "Siberian internment and the information warfare between USA and USSR" was set up in Part 3 of the same volume, "Restoration of the 731 unit and Hideo Futaki", "Forced labor to 2.4 million Germans, 500,000 Hungarian and 600,000 Japanese", "Brainwashing education and democratic movement", "Interrogation military returnees by GHQ: Interview with the Army's Project Stitch and Air Force Project Wringer", "352 Soviet Spies found in Army Project Stitch", "'Human GPS' by Air Force Project Wringer", and others (pp.269-284).

研究分野：政治学

キーワード：シベリア抑留 帰還者米軍尋問 米陸軍プロジェクトスティッチ 米空軍プロジェクトリンガー インテリジェンス GHQG2歴史課 GHQG2地理課 ラストボロフ事件

1. 研究開始当初の背景

本研究は、二つの領域での加藤の研究の交点で発想された。

(1) 一つは、1990年代に冷戦崩壊を機に始めた約100人の旧ソ連在住日本人粛清犠牲者の発掘と研究である。

加藤哲郎『モスクワで粛清された日本人』(青木書店、1994)や『国境を越えるユートピア』(平凡社ライブラリー、2002)でその概要を述べた際、旧ソ連社会を「奴隷包摂社会」ととらえた。

20世紀に現存した社会主義は、全労働力の1割以上を刑事犯・政治犯・外国人からなる安価な奴隷労働に依存し、鉱山採掘・森林伐採・鉄道建設・運河開設などに活用することでなりたっていた。ソルジェニツィン『収容者群島』に描かれた1920-30年代強制収容所の所在地は、戦後1945-50年期のドイツ人240万人、日本人60万人、ハンガリー人50万人など総計420万人に及ぶ戦争捕虜収容所と、地図上でほぼ重なることを確認できた。

日本人のシベリア抑留も1930年代スターリン粛清・強制労働の延長上にあり、ソ連の囚人・政治犯と一緒に働いた。捕虜収容所のいくつかは、第二次世界大戦後にいわゆる「閉鎖都市」「秘密都市」として、旧ソ連の核開発・宇宙開発に特化していった。

(2) もう一つの発想の契機は、21世紀になって取り組むようになった、米国国立公文書館(NARA)所蔵「ナチス及び日本帝国戦犯資料」の研究である。

戦時米国の諜報機関で戦後のCIA(中央情報局)の前身であるOSS(戦略情報局)の資料の中に米国日本研究者の戦時動員を見出し、1942年6月「日本計画」中に「天皇を平和のシンボルとして利用する」とあるのを発見して、加藤『象徴天皇制の起源』(平凡社新書、2005)をまとめた。

その後は戦後占領期に射程を広げ、ほぼ毎年米国国立公文書館に通って、2005年頃から続々と機密解除された「日本帝国戦犯資料」を収集・解読してきた。

CIA、MIS(陸軍情報部)、FBIの主題別ファイル・個人ファイルを含むその全体像については「戦後米国の情報戦と60年安保」(『年報 日本現代史』15号、2010)に概観したが、その中のMIS個人ファイルの日本人名約2000名中、昭和天皇裕仁、近衛文麿・東久邇稔彦ら皇室関係者、吉田茂・岸信介・中曽根康弘・大平正芳ら首相経験政治家、児玉誉士夫・笹川良一・里見甫ら右翼、有末精三・今村均・辻政信ら旧軍人、浅沼稻次郎・野坂参三・徳田球一ら左派有力者300名分を収集・解読した段階で、全体の8割以上を占める無名の人々の個人ファイルの大半が、1947-50年に舞鶴港などに帰還したシベリア抑留者に対する帰国時の米軍関係者(主として対敵諜報部隊CIC第441分隊に属する日系二世)による尋問と帰国後の監視記録であることに気づいた。

シベリア抑留帰還者が、旧ソ連の強制収容所(ラーゲリ)でソ連側から受けた思想教育「民主運動」や『日本新聞』、帰国前のソ連への忠誠契約の有無などが詳しく聞き取られていた。さらにそれら数百人の尋問記録を収容所ごとにまとめ、その労務内容、待遇、管理体制等を収容所毎に分析し地図や統計にしたMIS主題別ファイル「Project Stitch」があることがわかった。

またこれとは別に、米国空軍も第三次世界大戦を想定して「Project Wringer」というソ連・中国帰還者からの地誌情報収集を進めていたことがわかってきた。

本研究は、この二つの研究の交点で、旧ソ連抑留帰還者問題を、国際情報戦として解析することにした。

2. 研究の目的

本研究は、米国国立公文書館で機密解除された、占領期の連合国軍総司令部GHQによる旧ソ連日本人戦争捕虜=シベリア抑留帰還者の尋問資料を用いて、第二次世界大戦終了時から朝鮮戦争期にかけての米ソ情報戦の実態を解明しようとするものである。主たる素材は、米国陸軍のProject Stitch(縫い物作戦、RG319)尋問個票約1000人分と空軍Project Wringer(絞り作戦、RG341)約1万人分である。

(1) この問題の解明を通じて、占領期の日本を舞台にした東西冷戦の実相と共に、GHQ各機関(GSとG2、G2内の戦史課・地理課)とワシントンの國務省・陸軍省・空軍省・国家安全保障会議(NSC)・中央情報局(CIA)との関係、及び、旧ソ連政治代表部、内務人民委員部(NKVD/KGB)、赤軍諜報部(GRU)との対抗が明らかになり、日本政治における「逆コース」政策転換過程の深奥が解明される。

(2) シベリア抑留については、占領期から現在まで、2000点以上の体験記・ドキュメント・研究が刊行されている。旧ソ連崩壊後、ロシアでの研究もいくつか紹介されている。概説書としては白井久也『検証 シベリア抑留』(平凡社新書、2010)、栗原俊雄『シベリア抑留——未完の悲劇』(岩波新書、2009)等があるが、本研究に役立つのは、ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会『捕虜体験記』全8巻(1984-98年)及び長勢了治『シベリア抑留全史』(原書房、2013)である。前者は多数の体験記・手記を収容地域・収容所別で収録しており(菊池寛賞受賞)、後者は2010年6月に議員立法で成立した抑留経験者への特別給付金支給などを定めたシベリア特措法を期に結成されたシベリア抑留研究会(代表 富田武)の最新の成果をふくんだ本格的な研究書である。ただし両書とも、帰国時の米軍尋問については、その存在が触れられたのみである。

(3) 占領期における米軍の諜報活動は、かつては松本清張・吉原公一郎・大野達三らが

追いかける推理小説に近い領域であったが、春名幹男『秘密のファイル』(共同通信社、2000)、山本武利『ブラック・プロパガンダ』(岩波書店、2002)を先駆に米国側第一次史資料にもとづく学術研究が始まり、米国国立公文書館で「ナチス及び日本帝国戦犯資料」が機密解除された2005年頃から、申請者や有馬哲夫、井上正也、吉田則昭らの第一次資料にもとづく研究、それらを本格的軍事研究に組み入れた柴山太『日本再軍備への道』(ミネルヴァ書房、2010)、対敵諜報部隊CICの活動に特化した明田川融『占領期対敵諜報活動第441対敵諜報支隊調書』(現代資料出版、2004)などが現れている。

しかし、本研究に直接関わる先行研究はなく、歴史的背景についての参考文献となる。(4) 強いて言えば、佐藤晋「大陸引揚者と共産圏情報——日米両政府の引揚者尋問調査」(増田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』慶應義塾大学出版会、2012)が主題に着目した唯一の学術研究であるが、国会図書館所蔵の日本側資料と米国軍一般報告にもとづくATIS(連合軍通訳翻訳部)の活動の概観で、米国側第一次史料、実際に行われた尋問個票・尋問内容には立ち入っていない。むしろ、自ら帰還者で当時「トップ屋」と呼ばれた読売新聞記者三田和夫のスクープ・ドキュメント「幻兵団事件」で例示的に挙げられたCIC尋問書が、加藤のサンプル調査結果と合致していた(『迎えに来たジープ奪われた平和』20世紀社、1955)。本研究は、この未開拓の領域を、第一次史資料の精査にもとづき明らかにしていく。

この問題の解明を通じて、占領期の日本を舞台にした東西冷戦の実相と共に、GHQ各機関(GSとG2、G2内の戦史課・地理課)とワシントンの国務省・陸軍省・空軍省・国家安全保障会議(NSC)・中央情報局(CIA)との関係、及び、旧ソ連政治代表部、内務人民委員部(NKVD/KGB)、赤軍諜報部(GRU)との対抗が明らかになり、日本政治における「逆コース」政策転換過程の深奥が解明される。

3. 研究の方法

本研究の素材になるのは、米国国立公文書館(NARA)所蔵で機密解除が確認されている二つの系列の資料、第一に米国陸軍情報部(RG319)のProject Stitch報告書とその原票であるIRR個人ファイル約1000人分、第二に米国空軍情報部(RG341)のProject Wringer尋問個票約1万人分である。

この二つの資料群を収集・解読し、占領期米軍による旧ソ連戦争捕虜=シベリア抑留帰還者尋問の規模・手法・内容を明らかにすることが、中心的研究内容になる。

あわせて問題・論点に即して、日本側資料、ロシア側旧ソ連資料、ドイツ人捕虜の事例と比較対照し、加藤の提唱する「機動戦-陣地戦-情報戦」論(『情報戦の時代』『情報戦と現代史』花伝社、2007)と、ジョセフ・ナイの

「ソフトパワー」論を用いて、冷戦期「国際情報戦」の視角から明らかにしていった。

4. 研究成果

米国国立公文書館では、米国陸軍と空軍の、二つの大きなプロジェクトが、日本人戦争捕虜(POW)尋問記録のコレクションになっていた。第一は米国陸軍のProject Stitch(縫い物作戦)で、RG(Record Group)319(Army)のIRRファイル中に、1000人以上の個人ファイルがあった。主としてソ連で受けた思想工作、共産主義への忠誠度をチェックする政治的尋問が中心である。第二は、RG341の米国空軍によるProject Wringer(絞り作戦)個票である。抑留地の地誌的特徴、特に飛行場・港湾・鉄道や鉱山・工場・建築物の配置を聞き取り、ありうべき第三次世界大戦でのソ連・中国・朝鮮半島の軍事地図を作ることとした尋問資料が、少なくとも1万人分はありと確認できた。中には舞鶴等帰還船上陸時点での陸軍尋問とともに、帰還後数か月・数年後に複数回の空軍尋問を受けた帰還者もいた。なお、こうした尋問はドイツ人についても行われ、西ドイツ政府は帰還者国家補償のため1950-70年代に100万人以上の記録を報告書にまとめている(パウル・カレル『捕虜』学研文庫、2007)。ドイツ人捕虜と日本人抑留者の比較も、本研究の特徴の一つである。

成果を要約すると、以下ようになる。

米国によるシベリア抑留帰還者尋問の規模と範囲、日本人調査員利用の実態を、日本で初めて本格的に明らかにした。

米国側尋問調査により得られたソ連側思想工作・情報工作の規模と米国側の対応を明らかにした。

尋問調査におけるGHQ諸機関の分担と役割、特に陸軍G2、空軍、CIA東京支局の関係、G2におけるProject Stitchに対応する歴史課とProject Wringerを担当する地理課の存在を明らかにできた。

米軍尋問調査記録から得られるソ連側対日工作の内容、特に「幻兵団」とソ連核開発への日本人抑留者の動員可能性を、ドイツ人捕虜の記録から明らかになっているウラン採掘強制労働、科学者・技術者の原水爆製造への動員と対比し、一部を明らかにした。

尋問記録から得られる関東軍防疫給水部731部隊、朝鮮戦争期米軍工作との関連、特に鹿地亘事件・ラストボロフ事件についても資料的に分かる限りで単著『「飽食した悪魔」の戦後』中で言及することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

加藤哲郎、大学のグローバル化と日本の社会科学、信州大学『イノベーション・マネージメント』研究、査読無、13号、2018、1-8

加藤哲郎、現代社会科学の一部となった
グラムシ、『唯物論研究』、査読無、139号、
2017、10-19

加藤哲郎、米国共産党日本人部研究序説、
中部大学年報『アリーナ』、査読有、20号、
2017、399-497

加藤哲郎、ゾルゲ事件と伊藤律一ー歴史と
しての占領期共産党、日露歴史研究センター
『ゾルゲ事件外国語文献翻訳集』、査読無、
第47号、2016、32-45

加藤哲郎、戦争の記憶ーゾルゲ事件から
シベリア抑留へ、日露歴史研究センター『ゾ
ルゲ事件外国語文献翻訳集』、査読無、第46
号、2016、11-40

加藤哲郎、米国の占領政策ー検閲と宣伝、
波多野澄雄・東郷和彦編『歴史問題ハンドブ
ック』岩波書店、査読無、2015、166-171

加藤哲郎、占領期における原爆・原子力言
説と検閲、木村朗・高橋博子編『核時代の神
話と虚像』明石書店、査読無、2015、73-92

加藤哲郎、コミンテルンと佐野碩、菅孝行
編『佐野碩 人と仕事』藤原書店、査読無、
2015、126-164

加藤哲郎、戦後ゾルゲ団、第2のゾルゲ事
件の謀略？、日露歴史研究センター『ゾルゲ
事件外国語文献翻訳集』、査読無、第42号、
2015、51-58

加藤哲郎・井関正久、戦後日本の知識人と
ドイツ、工藤章・田嶋信雄編『戦後日独関係
史』東京大学出版会、査読無、2014、471-521

加藤哲郎、国際歴史探偵の20年、法政大
学『大原社会問題研究所雑誌』、査読無、第
670号、2014、1-26

〔学会発表〕(計2件)

KATO, Tetsuro, The war of Information
about biological warfare by unit 731 of the
Kwantung Army, Cambridge workshop:
Propaganda and Journalism during/on
the second Sino-Japanese War 1937-1945,
2018.3.19 - 21, Cambridge, UK

加藤哲郎、戦後ゾルゲ団、第2のゾルゲ事
件の謀略？。第8回ゾルゲ事件国際シンポジ
ウム(招待講演)、2014年11月8日、東京・
明治大学

〔図書〕(計5件)

加藤哲郎、花伝社、「飽食した悪魔」の戦
後ー731部隊と二木秀雄「政界ジープ」、
2017、400

加藤哲郎編・解説、現代史料出版、CIA
日本問題ファイル、全2巻、2016、569

加藤哲郎編・解説、国書刊行会、近代日本
博覧会資料集成 紀元2600年記念日本万国
博覧会、全4巻・別巻、2016、3682

加藤哲郎編・解説、現代史料出版、CIA
日本人ファイル、全12巻、2015、各巻平均
300

Michiko Tanaka, Tetsuro Kato et.al. eds.,
メキシコ大学院大学出版局、Politica y

pensamiento politico en Japon 1926-2012
[スペイン語『近現代日本政治資料集 1926-
2012年』], 2012, 955

〔その他〕

ホームページ等

「加藤哲郎のネチズン・カレッジ」Database
<http://netizen.html.xdomain.jp/home.htm>
|

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 哲郎 (KATO, Tetsuro)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：30115547